

今こそ、備えを強化する時 ⑩

昨年11月26日(土)、のいちふれあいセンターで開催された「香南市南海地震フォーラム」約300人の来場者か、地震、津波に関する講演やパネルディスカッションに耳を傾け、改めて地震・津波の脅威を知り、命を守る対策を確認しました。1月号の講演会に引き続き、今回は、パネルディスカッションの内容を編集して掲載いたします。

問い合わせ
防災対策課
☎ 57-8501



◆パネラー◆ ※敬称略
鈴木浩徳(宮城県女川町企画課長)
佐藤毅(宮城県女川町健康福祉課参事)
原 忠(高知大学准教授)
石田和成(高知駐屯地 第50普通科連隊長)
仙頭義寛(香南市長)

香南市南海地震フォーラム 今できることを考える

2011年3月11日午後2時46分、三陸沖を震源に発生した東日本大震災は、国内観測史上最大のマグニチュード9.0を記録。地震に伴って発生した津波は場所によって波高10m以上、最大遡上高は40・5mにもなりました。

震災発生から11カ月。被災地では、今も復興の光すら見えない地域もあります。私たちは、東日本大震災を教訓に、近い将来必ず起こるといわれている南海地震に向けてどうすればよいのか？
今改めて、一人ひとりがその問いに向き合わなければなりません。



仙頭義寛(香南市長)

仙頭市長は5月に被災地を訪れたそうですが、どのようなことを感じましたか？

仙頭 5月15日、仙台空港に降りたわけですが、ビニールハウスは支柱の根元のみ、海岸線近くの工場や人家も基礎のみ、決壊した北上川の堤防、流出した北上川大橋、大川小学校周辺では学校と少しのコンクリートが残るのみでした。また、雄勝町や女川町でも海岸線周辺の集落は建物の基礎が残るのみでした。その悲惨な現状を目の当たりにして、地震と津波のエネルギーの大きさ、すごさ、怖さを痛感しました。それと同時に、無力感と、もしこれが、香南市で起こったらと

自衛隊が派遣された被災地の状況と活動内容について

石田 3月19日に活動を始めました。被災地はすべて建物が倒壊、あるいは堤防が決壊したために水没していました。家屋がすべて倒壊しているうえにインフラも機能が停止しており、本当に人が生活していたのかという感じを受けました。



石田和成(高知駐屯地第50普通科連隊長)

活動中、隊員たちを支えていた思いと隊員の心的外傷後ストレス障害について

石田 今、自衛隊がやらなければいづるのかという思いと、ご自身が被災されているのにもかわららず、我々が活動するときに手を振ってくださったり、笑顔で「ありがとう」という感謝の言葉などをいただき、苦しい任務でしたが頑張らないといけないという思いがありました。また、捜索活動をして2週間ほど経ったころ、小学校1年生のお子さんから隊員が手紙をもらいましたので、読ませていただきます。

「自衛隊さんへ お元氣ですか？ 津波のせいで大川小学校の私のお友達がみんな死んでしまいました。でも、自衛隊さんが頑張ってくれているので私も頑張ります。日本を助けてください。いつも応援していま



◆司会◆ ※敬称略
小松慎典(香南ケーブルテレビ)

活動内容は、大きく2つあります。1つは行方不明者の捜索、もう1つは救援物資の輸送です。捜索は被害状況により、水没地域ではボートを浮かべて、瓦礫を除去しながらの捜索、倒壊家屋のところは、二戸一戸瓦礫を除去しながらの捜索活動でした。また、救援物資の輸送は、避難所への物資の輸送と、道路が使えず孤立しては、ヘリコプターや



鈴木浩徳(女川町企画課長)

町の甚大な被害を目の当たりにし、鈴木さんはどのようなことを感じましたか？

鈴木 物心がついてから、津波は何度か経験していますが、それは数十センチから1mくらいの高さのものでした。地震から30数分後に津波がやってきたわけですが、高さ、威力は想像を絶す